

# INTERVIEW



## 古川 修のインタビュー

### 世界の人権侵害と戦う国際弁護士

「世界中の人に尊厳ある生を！」

**土井 香苗 さん**

ヒューマンライツウオッチ  
(HRW)日本事務所代表、弁護士

**土井** エリトリアは人類史とともにあるほどの古い地域ですが、独立したのはアフリカでもっとも若い国です。エチオピアからの独立戦争が長く続き、国家建設が始まったばかりでした。そこで1年間、現地の人たちと一緒に生活をしながら調査活動をしました。とてもよい勉強になりました。

**古川** ちょっといいわるな質問をします。近年のイラクやアフガンへのブッシュやブレアの「強制民主化」などにみられるように、西欧的な価値観で途上国を判断し、それを押し付けるという批判がありますね。発展途上国の独裁者による人権抑圧を告発する際に、こういう批判に直面しませんか？

**土井** それはいつも議論になる点です。でも現実的にひどい人権侵害を目の当たりにして、それを看過することはできませんよね。エリトリアの私の友人も独立したジャーナリストであっただけで、獄中死したと聞いています。

**古川** 発展途上国の人からすれば「われわれは食べるのが先決。西欧の人権批判は飽食の先行者の『上から目線』の物言いじゃないか」と言います。

**土井** そういう面もあるでしょうが、

まず「火を消すことが大切です。火事の原因を究めることと並行して活動することが大切なんじゃないでしょうか。こうした人権侵害を完全になくすることは難しいでしょう。でも少しでも減らす努力はしなければなりません。ほとんどの場合、法律はあっても罰則規定がなく、実質的に野放しのケースが多いです。

**古川** 現実問題として、世界の独裁者を制する方法はあるんでしょうか？

**土井** 私たちのアプローチは、さっきの軍事的方法などを使って強制力を働かせるというよりも、彼らに「人権侵害はコストに見合わない」ということを悟らせる方法をとっています。具体的にはロビー活動を強化し、国際世論を喚起し、人権侵害行為を包圍するという点です。それにより（武力に頼るのではなく）独裁者の金融資産を凍結させたり、武器禁輸を実現したり、ひいては、投資家が投資を控えることにもなり経済活動にもマイナスになることを悟らせるわけです。

**古川** HRWとして、東アジアはどういう位置づけでしょうか？

**土井** 東アジアでは北朝鮮、ビルマ、インドネシア、スリランカなど問題を抱えている国はたくさんあります。日

本事務所は開設してまだ一年目です。わたしたちは「ブレイヤーの多様化」と称して、いろんな人が立場を超えて関心を寄せるように広報活動をしています。

**古川** 日本政府の取り組みはどうですか？

**土井** まだまだ関心が十分とは言えません。わたしたちは、日本の外交政策の中での人権外交の位置づけを強化するように政府に働きかけています。スリランカなどは日本は最大の政府援助国ですから、日本政府が人権問題で動けば大きなインパクトがあります。

**古川** 民間での活動はどうですか？

**土井** 活動資金を集めることも大事なことなんです。日本ではまだまだ寄付文化が根付いていないと思います。企業は、われわれのような人権NGOの活動には積極的に寄付することは少ないです。

**古川** ヒューマンライツウオッチの日本事務所として、土井さんの役目が大きいですね。人間の尊厳を守るというすばらしいお仕事ですが、もうそんな仕事が必要ない「時代がいつかは来ることを祈ります。

**古川** まず、ヒューマンライツウオッチ(HRW)の概括をお願いします。

**土井** 政治的な党派性を排除し、人権侵害に関する調査報告を主としています。国際社会の注目をひきつけるために、さまざまなロビー活動も行います。世界九十カ国で活動しています。人権侵害を告発し、国際メディアで取り上げるように動きます。それには性差別、拷問、少年兵問題、政治腐敗やさらには戦争犯罪の問題もとりあげます。地雷禁止キャンペーンもしてきました。他にも、政治的迫害の中で戦う作家への迫害や投獄をとめるキャンペーンもあります。これは表現の自由を勝ち取る戦いのひとつです。死刑廃止、同性婚への差別撤廃の取り組みなどもあり、あらゆる人間の尊厳を阻むものへの広範な抵抗を組織するものです。

**古川** 人権擁護活動というとアムネスティの名をよく耳にしますが、違いは？

**土井** 基本的にめざしているのは同じですが、アムネスティはどちらからと



### プロフィール

国際的な人権派弁護士、ということで「闘士」を想像し、多少構えて臨みました。なにしろ大学在学中に単身アフリカのエリトリアに飛び込んだり、さらにはその後ニューヨークのヒューマンライツウオッチ(HRW)本部へ乗り込んで日本支部の開設を説得した、という事前に仕入れた知識でしたので女傑(1)かと思っていました。でも登場したのはなんと若いフツウの(当たり前?)女性でした。インターネットのWikiページには土井さんの関連記事がたくさん出てきます。最近ではマスコミへの登場機会がぐんと増えて、朝日新聞のアエラの表紙を飾ったり、毎日新聞に「時代を駆ける」を連載中ですので、土井さんのことを御存知のかたも多いでしょう。東大法学部三年で司法修習生に合格しても、約束されたキャリアの道は見向きもせず自分の信念を通すなんて、言うは易し行は難し。「最近の若者は…」という年寄りの繰言をひっくり返すに十分な若さと女性パワーを見せつけられたと思います。

### 著作など

『司法修習生が見た裁判のウラ側 「司法の現実に驚いた53期修習生の会」の一員として』現代文化社、『「ようこそ」と言える日本へ』岩波書店、『テキストブック 現代の人権第三版』日本評論者、など